

B 127 被服縫合部の損耗に関する研究 (第2報)

— 下衣について —

○京都女大家政 福井弥生 大阪市大生活科学 三平和雄

目的 被服縫合部の損耗について検討するため、1報につづいて本報は、下衣のスラックスを実験対象とし、縫合部位別縫糸の弱化程度を追求すると共に、その縫合部にかかる外的負荷の大きさより、弱化の実態を検討することを目的とした。

方法 A, Bの2方法で実験を行った。Aは、古着スラックス11着について、縫合部の縫糸強度測定による方法である。縫合部位は、脇、後ろ股上、股下の各縫目線における、人体の衣服設計上の基準線となる周径値を含む17ヶ所とした。この各部位の縫糸を抽出し、強度測定を行った。Bは、縫合部にかかる外力の測定による方法である。実験用スラックスを、素材はシーチングとし、縫糸は未延伸糸を用いて製作した。被験者は2名、各5着ずつ試着し、運動を行った後、各部位の未延伸糸の伸びを測定し、その結果より縫合部にかかる力の分布を検討した。

結果 各スラックスの弱化の程度は、材質や着用状態により大差があるが、主成分分析することにより、部位による弱化の特徴を抽出することができた。すなわち、

(1) 11着の部位別強度の弱化が大きい部位は、いずれも人体に密着し、クロッチポイントから股下、股上に移行する縫目である。(2) 各部位の弱化程度は、第1・2主成分のスコアで、股下部、脇部の各縫目およびその他の部位に、それぞれグループ分けできる。

(3) スラックスの場合、古着縫糸強度と実験用未延伸糸の伸びの傾向は、必ずしも相関があるとは云えない。以上のことから、スラックスの縫合部は弱化の程度に差があるが、それは縫目にかかる力だけでなく、他に脆化の原因があると考えられた。